

「地方創生カレッジ in 奈良」 実施成果のポイント

1. 地域課題・テーマ

「地域の観光資源・人的資源をESD-SDGsの視点で磨き直す」

2. 現状と問題点

「奈良SDGs学び旅」は、奈良の歴史文化遺産にSDGsの視点を追加することで、従来の物見遊山的な奈良観光のスタイルから、深く学び・楽しむ旅の開発と実践に取り組んできた。奈良市以外の地域でも、新たな観光コンテンツの開発や既存の地域資源に、SDGsに関連する新たな価値を付加したいが、何をしてもよいかかわらず、試行錯誤している。

3. 目指すべき方向性・将来像と実現に向けた具体的施策

(1) 将来像

観光や交流のためのプログラムや仕組みづくり、高齢化や後継者問題、空き家問題等の課題解決のために、地域の観光資源や人的資源を地域外からみた新たな価値軸・評価軸で捉え直す。ESD-SDGsの視点を持った教育大チームと地域が継続的に連携していくことで、持続可能な地域社会づくりに向けて、能動的に行動する人を育てる環境を構築する。

※奈良教育大チーム = ESDティーチャープログラム履修学生、ユネスコクラブ、ESD・SDGsセンター(センター長 中澤静男准教授)

(2) 具体的施策

- ①SDGsの実践的な学びの場を求める企業や大学、学校(教育旅行)、団体などと地域をつなげ、持続的な交流のベースづくりを行なう。
「持続可能な地域社会づくりに向けて、能動的に行動する人を育てる」ことを目標に、地域資源・人的資源を連携して磨き上げる仕組みを創る。
- ②地域の魅力を伝える知見に加えて、ESD-SDGsの視点を持ったガイド(講師)の育成や研修を重ねて行う。
- ③地域と地域外が協働して交流プログラムを磨き上げる。

(3) スケジュール

SDGs視点を持った現地ガイドの育成やセミナー等の具体的なテーマを設定した上で、教育大ユネスコクラブと両村の交流・意見交換の持続的な場づくりをフォローアップする。

- ・4月初旬に学生チームと教育大の先生たちと振り返りを行なった上で、具体的な計画を作成し、5月初旬には両村に提案する場を設ける。
- ・6月から定期的な意見交換や学び合いの場、交流プログラム等の具体的な磨き上げをスタートさせる。

「地方創生カレッジ in 奈良」 実施成果のポイント

4. 今回のフィールドワークや講義、プレゼンテーションやグループワークを通じて得た気づき

(1) 地域・属性・世代をまたぐ交流

フィールドワークから発表まで、地域内の担い手たちと、ESD+SDGsの新たな視点を実装した地域外の学生たちとの体験・対話・交流をベースに事業を進めた。また大学、民間、行政という属性の異なる若者からシニアまでの幅広い世代が参加したことで、自分たちの認識や価値観とは違う意見を聞き、気づきや刺激を与え合う「学び合い」ができ、そこに連帯感や信頼感が生まれた。

(2) 学生側に生まれた気づきと意欲

フィールドワークは、その地域にずっと暮らしている人、一度外に出て価値に気付いた人、外から地域の魅力に惹かれて加わった人など、さまざまな背景を持った地域創生の担い手たちが参加し、そのような人々から地域の魅力や課題について教えてもらう方法で行った。そのことによって学生たち自身が、「見て通り過ぎる観光」とは全く違う「SDGsの視点で地域資源を捉え、学び合う旅」を体験し、地域の人とつながることができた。その結果「また会いにきたい」、「体験型の交流は感動・関心が高まる大きなきっかけになると改めて思った」と感じ、今まで見えなかった地域の魅力や価値を実感をもって証明・提案してくれた。さらに参画した学生たちには「継続して地域の課題に取り組んでいきたい」という意欲が生まれた。

(3) 地域側のSDGsについての理解

地方創生の担い手に対して、学生たちがESDの視点でとらえた魅力や特異性を、明快で具体的な発表によって伝えたことで、今まで漠然としていた自分の地域の価値や魅力に気づき、「継続して学生の意見を取り入れたい」、「自分たちの仕事や取り組んでいる地域の課題解決に活かすことができるかもしれない」と感じるに至った。

(4) ESDと地方創生の効果の高め合い

曾爾村での農体験プログラムや、明日香村での古民家再生の地産地消レストラン等、地元活性化のために、住民が自発的な行動をした事例を見ることができた。それによって地域の課題を自分事として捉え、個人的負担を背負ってでも実際に行動してくれる人の存在が欠かせないことが分かった。そして、「持続可能な地域社会づくりに向けて、能動的に行動する人を育てる」というのは、まさにESD (Education for Sustainable Development) の目指すところであり、地方創生のための人材づくりには、奈良教育大学が推進するESDが有効な手法であることを、企画側、参加者側、双方で確信することができた。

「地方創生カレッジ in 奈良」 実施成果のポイント

5. 成果スキーム図

